昭和十四年三月十五日

正午版 報知新聞

十四日發行

顔を見ぬ悲喜劇

これは珍・結婚の儀式

夢のアフガン

尾崎技師のお土産話(下)

アフガニスタンで最も特色のある習俗は結婚式である式當日の晝間に婿さんが嫁さんの家まで馬に乘ってお迎へに行く、首都のカブール邊りでは馬車、自動車で迎へに行きます……アフガニスタンに自動車があるとてびつくりしてはいけませんよ……そして夕方には嫁さんを一緒に連れてまた馬で歸つてくる、つまり日本流にいへば『晝に婿入り夕方に嫁入り』といふ按排、それからいよ〳〵お客樣を招待するのですが、回教の教義に則つて男女相見えるを許さぬため男は男だけの部屋、女は女だけの部屋でもてなす、その間音樂師は盛んに胡弓、手オルガン、琵琶、太鼓をかなでながら軍歌やら戀歌やら叙情詩を唄ふ、客もこれに合せて唄ひまくる

またある客は

トランプを取つたりサイコロを振つて丁半を爭ふ、こんなドンチヤン騒ぎの間にも御馳走は絶え間なく運ばれる、即ちお米を油でいためてその中に羊肉、鳥肉を詰めてある料理、カボチヤをすりつぶし味をつけて煮た料理、牛乳で澱粉を固めた料理等〳〵、かくて夜十一時ともなればいよ〳〵結婚式が始まる、勿論婿さんの式場、嫁さんの式場と二つに分れてゐる、花婿を例に引いていふと婿を眞ん中にし客はそれを取り卷いて着席、間もなく召使が種々の花で飾りをつけた盆の眞ん中に着物、帽子、靴を載せて靜〳〵と花婿の前へ据ゑる、つまり花嫁からの贈り物が届きましたといふ型、この贈り物を身につけ終るのを見すまして坊さんはいきなり婿の頭上に砂糖の豆を振撒く、これは將來幸福なれといふ意味

これが濟むと

婿の右手にヒナといふ黄色い藥を塗りつけ、その上に銀の袋をはめて更に綿布でしばりつける（奇怪なことをするものだと皆さんは怪しまれるかも知れんが、皆それ〳〵エロ・グロ的理由を含んでゐる）以上で式は終るのだが、同樣の儀禮が花嫁の式場でも繰返される、こゝで夫婦は初めて別室に退き床入りとなる、アフガンの男は結婚式前嫁となる女の顔を見ることが出來ないのだから飛んだ悲劇が起る、絶世の美人だとのうはさを信じ胸をワク〳〵させて式を擧げてみた處、醜女と判明、今更ベヤをかいても追付かない、泣く〳〵一生を共に喜らす、だが半面よい點もある、浮氣をしようにものれんに腕押しで美女にお目にかゝる機會がないから奥さんは角を生やさずに濟む、一體この國は一夫多妻であつたが、近頃は次第に一夫一妻になりつゝある

爽快なのは鹿

狩りだ、野生の鹿が群つてゐる眞ん中に自動車を乘入れて片つ端から轢き殺してしまふ、日本のやうに一匹の鹿を血眼で追ひ廻すのと違つて豪勢なことおびたゞしい【寫眞は儀式に盛裝するお歴々】